

「染川浩美 彫刻・絵画展～思いを形に～」 ギャラリートーク

期日：2022年8月11日（木）

場所：エイブル3階 研修室

講師：染川 浩美 さん

美術を愛好して

皆さんこんにちは。私は、1960年8月29日、松尾登と晴美の子供として生まれました。浩美の「浩」は、今の天皇陛下のお名前が浩宮様で、同じ年に生まれたのでもらいました。「美」は、美を愛し、美を創造し、美しく育ちますようにと願いを込めてつけてもらいました。

美術を愛好するようになった半生に入りますけれども、幼少期はやっぱり母の影響がすごいなと思いますね。

幼いながらに憶えているのは、マリア像みたいな陶器や絵葉書があったこと。そして、とにかく絵本をよく買ってもらいました。いちばん印象に残っているのはルノアールの絵みみたいな『白雪姫』。油絵タッチで、それがとても印象に残っています。

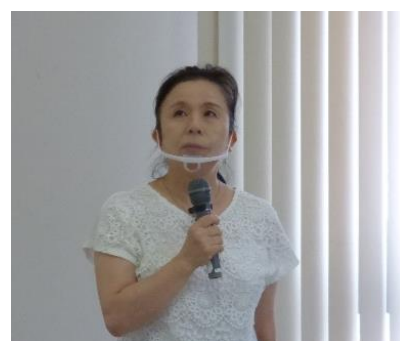
そして、年賀状の干支を描くときには、姉と比較されるんですね。「静香ちゃんは足の形がよかね」「浩美ちゃんは顔がよう似とる」とか言ってですね。うまく競争を仕組まれたなと思います。

私が小学生の頃、母は内職で洋裁をしていました。布の端切れを使って私たち姉妹に世界唯一のデザインの服を作ってくれていたんですよ。その影響もあって、服の色、柄、デザインにとっても興味を持ちました。

また、「リボン」という少女マンガに、ファッションデザイナーが主役のマンガがあって、「デザイン画を描いて送る」という懸賞がありました。スタイル画も上手く描かなければと思って、里中満智子さんや大和和紀さんの絵を模写して頑張りました。結果はダメでした。ただ、マンガを模写していたことで人物像は結構描けるようになって、友達から「浩美ちゃん、描いて描いて」って言われて、少し自信を持った時代がありました。

スケッチ大会もよく参加しました。でも、母が忙しかったのでついてきてもらったことはなかったんです。5年生の時の祐徳神社スケッチ会で良い賞をもらって、6年生の時はただの入選だったんですね。それで後で「これは大人が手伝っている絵だ」と評価された、ということを知って、その時はショックを受けたんですが、教師になったときに「そういう絵も、評価をしていかないといけないな」と思ったことでした。

中学生時代は植松先生に指導を受けました。「調子が乗らん時には、良い絵は描けん」と言われていました。読書感想画と風景画を何か月もかけて描いていたんですが、植松先生のアドバイスで印象に残っ



▲ 講師 染川浩美さん

ているのが「絵は、この厚さの分、重さの分、価値が重たくなるんだ」という言葉です。「塗り重ねろ」と言われていた、その先生の展覧会を観たんですね。「鶴殿石仏」ってご存知ですか？相知町のね。それを同系色で、パレットナイフで、これでもかっていうくらいに厚塗りをされていたんですね。それを見て、先生が言われることがもう本当に納得で、大尊敬しました。

中学生の頃は、夢もたくさんありました。『アタック No.1』や『スチュワードス物語』など、女性が生き生きと夢を追いかけて、いじめられても負けずに頑張るっていうところにすごく感化されました。

高校は鹿島高校に行きましたけれど、2歳上の姉が佐賀大学の特別教員養成課程美術科を受験することになり、私も一緒に江頭正男先生に絵を習いました。デッサンは光と影を左から右に順序よく描くような指導をしてもらいましたが、反射光とか光の中にも影が見えるし、影の中にいろんな色がプリズムに見えたりするわけですね。私がそういうのを油絵で描くと「浩美は言うことを聴かん」と怒られてしょげておりましたけど。2年後、私も佐賀大学の特別教員養成課程美術科を受験を決め、高校で光武先生に絵を見てもらったり油絵の夏期講座に行ったりしました。受験前には、岩永京吉先生に指導してもらい、滑り止めなしで受験し、合格することができました。

大学2年の頃は、油絵と彫刻を県展に出していました。油絵は自己流でどうにかなるなと思いましたが、彫刻はよく知らなかったので、3年生から彫刻専攻になりました。

大学の時、よかったのはアルバイトですね。アルバイトで興味、関心、自分の適正に気づきました。お菓子屋さんのアルバイトは単調な仕事で、時間の過ぎるのも遅く、甘い匂いも7日でダメでした。いちばん良かったのが某化粧品メーカーのイベントで似顔絵を描く仕事です。1日50枚描いたこともあります。素早く、お客さんが喜ばれるように120パーセントきれいに描くという手腕を手にしました。家庭教師もクラスで一番ビリの子と、トップの子と同時進行で中学1年生の数学を教えていましたので、すごく工夫をしました。これも教師への道に役に立ったなと思います。

大学を卒業して玄海町立値賀中学校に赴任しました。そこでは、美術だけでなく、数学や英語、書道まで教えなくてははいけませんでした。

26歳の時に鹿島に戻り、嬉野中学校に赴任しました。そこで、鹿島美術人協会に入会して、楽しかったのがあの土曜日の夜ですね。熊本先生や鈴田先生方と一緒に、杉光定先生のアトリエで2時間ぐらい描くんですよ、絵を。その後のノミネート（飲み会）も楽しかったですね。

25歳の時に、大学の山本民二先生の『退官記念と教え子達展』が好評だったので「彫刻集団佐賀」という会が結成されました。今でもずっと続いています。「彫刻集団佐賀」の結成から2年後、そこに出品していた女子が集まって「グループ・ニケ」を発足しました。結婚して子供を出産したら、可愛い子供を創りたいんですね。でも、「彫刻集団佐賀」に出品するにはちょっとおこがましいかなと思ってですね。「彫刻集団佐賀」にも「グループ・ニケ」の『わたちの彫刻展』にも一回も欠かさず出せた、というのが私の自慢かなと。「継続は力なり」ですね。

45歳ぐらいの時に、尊敬する彫刻の古賀義治先生に「もうそろそろ中央展に出さんね」と言われましたが、仕事でも家庭でも忙しいときでした。「力を試したい」と思って出せたのが、教員を退職して佐賀大学の時間等履修生になってからです。2年目に『明日に向かって』という等身大の作品を作り、日展に初挑戦して初入選しました。昨年の『コロナよ去れ』という作品も入選して、ようやく夢が叶ったなと思っています。

振り返ってみると、自由にさせてくれた家族、そして先生方、仲間、教え子さん、いろんな出来事が私

を作ってくれたなと感謝しております。これからも感謝を忘れずに制作を続けていこうと思います。

では、次に、彫塑の制作工程を紹介しようと思います。

まず、アイデアスケッチをします。そしてマケットを作ります。模型とかデッサンの立体化みたいな感じですね。これを 360 度から見て調整をします。

次は、粘土練りをして芯棒を作って粘土の荒づけをして、そして補強をして細部を仕上げ、石膏取りをして、修正をして、着色というちょっと長い説明になります。

まず芯棒ですね。木や番線で作ります。粘土は、菊練りという焼き物を作る時の方法で練ります。そして、荒づけとって、コスチュームを着ている像でもまずは裸体をしかり作ります。この時、板や棒で叩いて粘土をしめます。ある程度したら、腰の辺りが重力で落ちてくるんですよ。芯棒に対して粘土が太いからですね。それで何度かビニール紐で縛ってしめます。スカートを履かせるときは、スカートの重さを支えるために木片をぶら下げています。そして、フレアの流れを作っています。

どこで完成とするか、がすごく難しいんですね。例えば、足ですね。モデルさんの足は綺麗な足だったんですけど、地球に立たせているので踏みしめたような感じで骨ばっているところは角ばって作る、とか強弱をつけています。髪の毛もヘルメットのようになることがあるので、どういう風になびかせたらいいかとか考えるわけです。

そして、出来上がったら石膏取りに入ります。

粘土のままでは可塑性があるので、半永久的に作品を残すために、石膏の本体にしたり、樹脂の本体にしたり、ブロンズ像に直したりします。乾漆像などもあります。私は乾漆像はしておりませんが。

まず、粘土の作品を石膏で型取ります。これを雌型と言います。次に、FRP（繊維強化プラスチック）を塗り込む。これが雄型です。そして、石膏型を割り出して中からFRPの作品が出てきます。継ぎ目にバリが出たり穴が開いたり、いろいろしますので、修正をします。そして着色をして仕上げという、大雑把に言うところになります。



▲ ①雌型取り 切金入れ



▲マケット

詳しく説明すると、①石膏型に 8 枚ほどの蓋をとらないと、中の粘土を掻き出したり、FRPを塗り込むことがたいへんになります。それで、まず蓋の仕切りとして切金を蓋のぬけ勾配を考えて、線がつながるように粘土に刺していきます。



▲ ②水溶性石膏でカバー

②そして、水溶性石膏を作ります。水にサラサラと粉状の石膏を入れて、泡を立てないように切るように混ぜます。ソフトクリームみたいです。石膏型の一層目は、耳の下とか鼻の中とか石膏が入りにくいところには石膏を指でデコピンのように散らして空気が入らないようにしていますが、あとは筆でバンバン叩くように塗っていきます。

次に、スタッフという麻の繊維を 20 センチぐらいに切って、かき揚げ天ぷらのような形にして石膏をまぶします。それをベタベタと貼っていきます。(左の写真) 顔の部分はまだ貼っていない状態で、あとは貼っています。

切金のところは厚みが薄く弱くなっているはいけないので、石膏を斜めに土手を埋めるような感じで盛り上げます。

③そして、前面には木枠をはしごのように付けます。寝せて作業をするため、また、石膏型が歪まないためです。背中や腕の蓋にも木やスタッフ壁をつけます。これも、型が歪まないため、後で蓋をはがすとき、取っ手にするためです。

④次は、粘土掻き出しです。背面の蓋を上から、頭部、背中、臀部、足、腕とはずしていき、粘土ベラ（ループ状）で掻き出していきます。

⑤最後に、雄型取りです。諸井謙司君という素晴らしい強靱な彫刻仲間ができましたので石膏取りに来てもらいました。この大きさになると二人がかりです。水と油は弾きますので、それを利用して粘土を掻き出したら粘土の塊でトントントン



▲ ③④石膏蓋外し 粘土かきだし

と小さな粘土くずを取って、すぐにFRPの雄型取りに入ります。

FRP自体はさほど毒性は無いんですけど、硬化剤と混ぜると危険で、その臭気を吸って二日間ぐらい下痢をしたことがあります。だから、防護服と防毒マスクを着用します。それとグラスファイバークロスというガラスの繊維を切って貼るので、その粉が目や口や鼻から入ると危険ですのでゴーグルもします。

刷毛で塗っていくんですが、硬化剤を混ぜていると 20 分で硬化をしますので急いで塗っていきます。諸井君が塗った後に、私がグラスファイバーをどんどん貼っていく、という作業を二人で行います。空気が入ったらいけないので刷毛で上からグッと押さえてや



▲ ⑤FRP樹脂で雄型取り

っていきます。そして、2メートル作品の大きさで、厚み 8 ミリぐらいまでFRPを塗り重ねていきます。はみ出したところは、早くカッターで切らないと貼り合わせの時に浮きますので、それも結構大変です。



▲ (肩・足) 支え木を固定

全部が8ミリぐらいになったら歪みますので、肩のところや足に支え木を入れていきます。(左写真)

蓋をした時に、支え木がぶつかって浮くこともあるので、そういうところをまたカッターで削るのも大変になってきます。

これは肩の部分です。肩の部分もFRPが20

分で乾くので石膏から離型してくるんですね。だから、木片をネジで石膏にねじ込んで、浮かないようにします。そして、閉じ合わせですね。たっぷりのFRPを接着剤にして。しっかり縛り付けるため、縛るビニール紐の先に木片を付けます。そして、それを引っ張ってグリッ、引っ張ってグリッとしながら凹凸のところに引っ掛けるという感じで締めます。

⑥そして、石膏の割り出しですね、以前はノミでカンカンと割っていたんですけども。この方法は諸井君から教わった、崇城大学式です。石膏取りの仕方が全然違っていたんですよ。でも快感でした。支えてもらって、最後に私がピーッって取るような感じですね。最後に、顔をベリッと剥がした時に綺麗に取れると嬉しいです。

⑦そして、修正です。接着剤にしていたFRPが継ぎ目のところに残るので、バリと呼ばれるそれを取っていきます。そして「ここに蓋があったよ」というのがわからないようにマチエールを整えていきます。大きいところはグラインダーで削ります。あとは木片に紙やすりをつけたものや木工ヤスリ、ミニヤスリで修正をしていきます。

途中で、彫像と土台の地球のバランスが悪かったので、地球を大きく修正することにしました。3点に、同じ大きさの木片を置いて、そして、その間を粘土で埋めて、高さを高くしました。本当は石膏型を取った方がいいんですけども、ちょっと面倒くさかったのでこのままFRPを直付けして研磨して繋げました。両手を広げているので、この地球のサイズでは、これでもバランスが悪いということに気づきましたが、日展の規定に「台座は付けない」というのがありました。それに気づいたのが遅かった。

成富宏先生に伺ったら「薄いコンパネぐらいやったらいいけど」と言われてコンパネを用意しました。そして、コンパネにつける時に外れないように10センチぐらいのビスを内側に付け、5センチぐらいのビスを外側にねじ込み、そしてFRPに硬化剤を混ぜるとき、硬化促進剤を使って固めました。

4、5分後に夫に手伝いに来てもらったときにはもう固まりかけていて、少し斜めに接着してしまいました。もう死活問題だと思って、諸井君に相談したら、いい方法を提案してくれました。

台座をミルフィーユ状態にして、右側にだけ1センチの誤差をごまかすためにベニヤ板を5枚入れるんですね。そうすると、これ自体が台形になっているのは、あまり気づかれまいだろうということで。建具屋さんをしている同級生が手伝いに来てくれて、本当に感謝です。



▲ (肩) 蓋のFRP樹脂そり防止



▲ 『世界に平和を』

⑧着色に入ります。穴が空いていないか、継ぎ目が不自然でないかを見るためにまずは一色でスプレーをかけます。次に、日本画用の絵具で、水干（すいひ）絵具というのをすりつぶして、人工の漆のカシューとカシューシンナーと混ぜて塗ります。それを3回ほど繰り返して、金粉を塗ります。金粉とセラックニスというのを混ぜてですね。出っ張っているところを中心に硬い刷毛で塗っていきます。そして、また水干絵具を塗り重ねるという方法で完成しました。

母なる地球に立ち、生命を尊ぶ女性像。両手にパワーを込めて神羅万象に愛情と安泰を願う。戦争は最大の環境破壊、戦争は最大の生命破壊という思いで。じつは、作り始めた時にはコロナが蔓延した頃だったので「もうコロナ、早く無くなって。」という思いで『コロナよ、去れ』という作品名で日展に出品しました。戻ってきてからアトリエに置いていたんですけど、それを見ながら作業している時にウクライナ戦争が始まって「世界に平和を」という気持ちが強くなり、今回『世界に平和を』という名前に変えました。

では、話を少し変えまして、家族をモデルにした作品を紹介したいと思います。



▲ 『母となりて』

結婚して母になって、至福の喜びを実在感のある彫刻に残したいと思って作りました。大好きな作品なんですけど、私ってわかりますか？右下に長男がいるんですね。白彫石という中国の石で作っています。

次男ご存じですか？赤ちゃんのときの似顔絵と小学校1年生の時の風呂上がりの姿です。髪の毛も体も濡れているのにバスタオルをマント代わりにして走り回っていました。肩甲骨やお尻が可愛いんですよ。

初孫ができました。今1歳8カ月です。まだ作っていません。同居をしていたら作れるのだと思いますが。

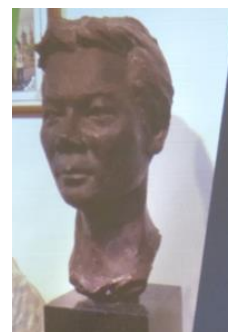


◀ 『つむじ風』

左の作品は母です。72歳で亡くなったんですが「母を作ってなかった」と思って、看病しながらデッサンをしていたらパッと目を開けて「なんで病気になってから描くの！」ってすごく怒られました。それで、これは元気な時の写真を見ながら、その後浮き彫りにしました。

夫は「俺は作ってくれんのかなあ？」と言いましたので「あ、そうねえ」って言って作りました。でも、アトリエに座っている人ではないので写真を何枚も撮りました。

「最後の1時間、アトリエに来て。」って言って、最終確認し



▲ 『夫』

たら、パーツの位置が寸分たがわず揃っていました。こんなによく彼を見ていたんだなあ、と思った次第です。



▲ モデルに魅せられて

作品を制作する時、モデルさんを見て「この人を作りたい」って思う時もあるんですね。この2つがそれです。(左写真)

左側は中学校の生徒さんです。彼女は頬の下の方が出ていて、口がきゅっと引き締まっています。「教会で見たキューピットの顔だ!」と思って天使をイメージして羽を付けました。

右側は、笑うと口がハート型になる親友です。写真を見て作りました。ちょっと古代ギリシャ風に、マチエールをガサガサと、FRPの上に石膏をまぶし、ヤスリで磨き、古びた大理石のような質感で作っています。



▲ 『イラクの母子』

平和への思いから、作品構想に入ることもあります。

『イラクの母子』は、真正面から見るのと、横から見るのとでは、感じが違うと思います。何かわかりますか?横には「No war」と彫っています。戦争反対ですね。そして、戦車なんですね。でも、正面から見ると不安な我が子を安心させる手を浮き彫りにしています。ポツポツポツとあるのはドリルの跡です。爆弾の跡、という感じで残っています。平和について考えながら作った作品です。



▲ 『アフガニスタンの少女』

あとは、アフガニスタンの少女も作りました。2003年3月21日、イラク攻撃のニュース映像が駆け巡りましたね。ゲームのように、爆撃の映像が流れていましたが、動揺と悲しみと怒りに縛られました。佐賀駅前でハンガーストライキがあっていました。知り合いの先生と2人で参加しました。みんなでイメージを歌いました。荒付けまで、別の少女像を作ろうとしていたんですけども、その日のうちにアフガニスタンの少女に作り変え、眠れない夜を過ごして一気に作りました。胸の部分に、爆弾や赤子を抱きしめる母、瓦礫のイラクを表現しています。

こちら(右写真)は焼き物で作ったものです。素焼きまでは左右対象になっていたんですけど、1300度で焼きますので、釉薬を付けると重みで斜めになってしまいました。自分の思いに逆らってPKO法案も通るし、集団的自衛権も通るし、というようなことで『ゆらぐ平和』という作品名にして出品しました。



▲ 『ゆらぐ平和』

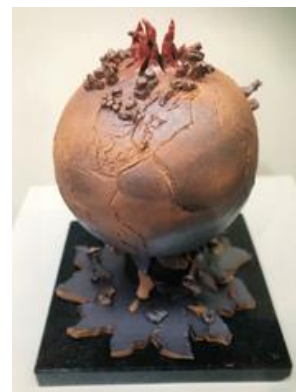


▲ 『マララ・ユスフザイ』

この方(左写真)はマララさんです。女子教育の必要を訴えて、ノーベル平和賞を受賞した人ですね。タリバンから、右頬に銃撃されて、痛々しい顔をされていましたが、どんどん回復をされてですね。授賞式の時のスピーチのビデオを見ながら写真を撮りました。まさに今、演説をされている、という表情を作っています。素材は硬質発泡スチロールで、彫刻をして、その上に厚さ1~2センチのブロンズ粘土という加工粘土を付けています。

次は、地球環境の悪化について訴えようと作品構想したものです。

地球温暖化で燃えている地球。南極は凍土も崩れ、足元から破壊が始まっています。地球上には原発や火力発電所、ミサイル基地が乱立しています。青い地球のほずですが、あえて陶土を焼きしめて茶色に焦げた色感、質感を出しました。



▲『崩れゆく私たちの地球』



▲ 陶芸作品

最近、陶芸も始めました。10年間陶芸をしていた母の影響だと思います。ランプシェードや眼鏡置き、イヤリングホルダーや花瓶などを作っています。絵付けにもはまっています。

日本画も2月から始めました。やりたいことリスト

を一つずつ実行に移そうと思っています。

海外旅行も、異文化に触れるとても大切な要素だと思っています。オーストラリアやニュージーランド、シンガポールや中国。フィンランドでは、教会の絵や彫刻にとっても感動しました。

また、去年から、42年ぶりに弓道を再開しました。今年の2月から山ガールにもなりました。「体力なくして何事も成せず！」です。うたごえ合唱団にも入っています。平和を求めていきたいなと思える合唱団です。



▲ 日本画

まとめに入ります。私の希望は、平和で、みんなが豊かな世界に住みたいということ。そして、そんな世界に100歳まで生きたい。彫刻や文化あふれる街に住みたい。

瀬戸内寂聴さんの言葉です。「生きるということは、死ぬ日まで自分の可能性を諦めず、与えられた才能や日々の仕事に努力し続けることです。」感銘しました。

生涯現役で有意義な人生にしたいと思います。平和な未来を子供たちに、子孫たちに残したい。子どもたちの笑顔を残していきたいと思います。どうも長い時間、ご清聴ありがとうございました。